

教えて！！漢方&鍼灸「漢方と『糖尿病』（後編）」

附属東洋医学研究所
助教 宮川亨平

教えて！！漢方&鍼灸



～漢方と「糖尿病」（後編）～

今回は古代中国での「糖尿病」の治療薬剤についての解説を行いました。

今回は平安時代までの日本で「糖尿病」がどのように描写されているか、「日記文学」の記述から読み取っていきます。

中編の末尾にも附記しましたとおり、日本の日記文学にはたびたび「飲水病」という名で糖尿病と思われる疾患が登場します。もちろん、口渇・多飲を来す病態は糖尿病以外に尿崩症などが存在していますが、現在の日本では糖尿病の治療患者数が250万人程度に対し、尿崩症罹患者は4,000人にも満たないことを考えると、実質的にはほぼ糖尿病と考えてもいいでしょう。藤原道長がこの「飲水病≒糖尿病」の患者であったことは有名なのでご存じの方もいるかもしれませんが、やはり私的な日記なので周囲より注目されやすい目立つ人物の記録は残りやすいということです。その病状は藤原実資の日記である『小右記』に詳しく記載されています。



『小右記』によると道長は50歳過ぎから「飲水数々」で「口乾無力」「顔色憔悴」であり「面枯槁身体未如尋常」（共に『小右記』長和5（1016）年5月の条）と記載されています。「口渇・多飲があり、顔色は憔悴ききって無力であり、顔も身体も尋常でないほどやせ細ってしまっている」、ということであり、進行した糖尿病の患者に多い所見が記されています。こういった口の乾きに対し、杏を舐めたり柿汁や葛根を服用して対応していたようです。ただし同じ頃の道長自身の日記である『御堂関白記』についてはこういった他覚所見についての記載はまったく見られません。自身の病識が乏しいところ、これもまた糖尿病です。

さらに翌々年の寛仁2（1018）年秋には「命目不見由、近則汝顔不殊見」（『小右記』寛仁2年10月17日の条）、「日来間、目不明」（『御堂関白記』寛仁2年11月6日の条）と両書に「目が見えない」「人の顔さえ判別できない」ことが記載されています。経過を見る限りは糖尿病性網膜症や糖尿病性白内障の可能性も考えられます。この翌年、寛仁3（1019）年の春頃より『御堂関白記』は欠条が増え、分量も前年の4分の1程度と極端に減少します。その後はほとんど記事がなく、単純に散逸した可能性もありますが、視力低下が著しくもはや日記を記せる状態ではなかったと考えるのが妥当でしょう。

